

秋田公立 美術大学 研究紀要

2021 第9号

秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART



解釈と行為

— “分かれようとしようとすることで現れる在り方” を描くことを通して探る —

堀川 すなお

1 はじめに

「人はモノの在り方をどのように分かろうとしようとしているのか」というテーマで制作した41枚のドローイング群『GI-kd16、WD(Jap)-ana・m、KB』(2017年制作)に、2020年それぞれのドローイングにタイトルを付けてアーカイブをおこなった。アーカイブをきっかけに、2008年から現在までどのようにモノの在り方を分かろうとしようとしてきたのかを考察したので本稿に記載する。

2 “分かれようとしようとすることで現れる在り方” について

「人はモノの存在をどのように分かろうとしようとしているのか」をテーマに、日常よく目にするモノをさまざまな方法で観察し記録している。この観察と記録の行為はモノ自体に接近しモノの形を現す行為でもあるが、モノに映し出された自らの認識が現われるとも言える。人はモノの存在をどのように分かろうとしようとしているのか、描くことを通して考えている。

3 今まで試みた観察方法について

“分かれようとしようとすることで現れる在り方”を探るため、2008年からさまざまな観察方法でモノを観察し記録している。当初は筆者1人で、外面や内面のさまざまな方向や距離からモノを観察し、主に視覚によるモノの形の観察記録を同一平面上に絵として記録した。さまざまな視点から得た観察記録を同一平面上に描くにあたり、視点の移動を画面上に反映させるため、観察記録を重ねる、繋げる、並列させるなどの方法で記録した。

2014年からは他人のモノの捉え方に興味を持ち、人と一緒にモノを観察することや、人にモノ

の捉え方について聞くことを始めた。試みた内容は、モノの存在を理解する際に、どのような視点の動かし方をしたのか、そしてどのように情報を得たのかを言葉で記録してもらうことや、視覚と手を用いた触覚とでは対象の捉え方にどのような違いがあるのかを実験し聞き取りをした¹。このように他者がどのようにモノを分かろうとしようとしているのかを聞き取るため、普段私達の意味疎通に使われる言葉を用いておこなった。しかし他者が記録した言葉や聞き取りで記録した言葉を理解するにあたり、私たちは言葉を通して一体何を共有しているのか、と疑問を持つようになった。そこから「他者により記されたモノの在り方を記録した文章」を読み解くことを始めた。

モノの在り方を記録した文章をどのように読み解くかという試みを、当初は筆者1人で行っていたが、他者はどのように文章を読み解くのかと疑問を持つようになった。そこから初めは日本生まれで日本育ちの人に聞き取りを行っていたが、2015年ポーラ振興財団の助成金を得て1年間ニューヨークに滞在制作をした際、民族や人種などそれぞれの背景の違いは文章の読み解きに何か影響を与えるではないかと考えた。そこから背景の異なるさまざまな人に、他者によって記されたモノの在り方を記録した文章を読んでもらい、どのように読むのか、どのように捉えるのか、どのように形をイメージするのかなどについて聞き取りをおこなった。

2016年日本に帰国した際、人に聞き取ることで集まった文章の読み取り方の記録を、人によってモノの捉え方が違うのは何故か、もしくは同じなのは何故かなどを分かろうとしようとするをおこなった。具体的には、文章と聞き取りの記録を照らし合わせ、そこにはどのような

捉え方があるのか読み解くことを試みた。

現在も継続してさまざまな方法でモノを観察し、時に他者のモノの捉え方を探り“分かろうとしようとする”ことで現れる在り方”を探っている。

4 モチーフについて

モチーフを決めるなかで重要にしていることは、名前を聞いてすぐにイメージが浮かぶモノであり他者と同じイメージが思い浮かびやすいモノを選んでいる。

2008年からバナナをモチーフに制作をしている。バナナは「バナナ」という言葉を聞くと、黄色くて湾曲した長細い形を想像しやすい。しかしその共通のイメージは本当に共通しているのだろうか。モチーフを選ぶときはそのような疑問を抱きやすいモノを選んでいる。バナナ以外のモチーフを通して“分かろうとしようとする”ことで現れる在り方”を記録できたと感じた場合は、モチーフを変更しても同様の記録が可能かを見るため同様の工程でバナナをモチーフに観察と記録を試みている。

5 線と色について

モノの存在を認識するには、認識したいモノとそれ以外を理解する必要があるのではと考えている。そのためモノの輪郭線が重要だと考え、2008年から線で記録を試みている。

2014年からは、モノを観察し記録する際に重要な要素となっているのは、言葉では無いかと考えるようになる。つまり感覚器官を通して得たモノの情報を一度言葉で整理をし、そのモノの情報を平面上に描いていると考えているからである。言葉をイメージに変換して記録する際に、線を基本に描写を試みている。例えば「面」という言葉から、面を塗りつぶして形を作るのではなく、線をどのように重ねることで面になるのか、もしくは線をどのように動かすことで面になるのかを考える。同様に線を用いて「黄色」と「緑」の違いはどのように表すことが可能かを考えている。このような考えから、青は筆者にとって色として使用しているのではなく、

気づきを記録する媒体として使用している。

制作を進めるにあたり、青色を使用すること、同じモチーフを使用すること、描く際に線を使用すること、のように描写のために要素を限定する理由は同じである。つまり、新しい気づきを制作の中で得たと思った際に、色の変化やモチーフの変化が制作に介入していると、何が変化をしたために今まで気づかなかった“分かろうとしようとする”ことで現れる在り方”に気づきを得ることができたのか分かりにくくなる。そのため色、モチーフ、描き方を固定している。

6 形について

形を描く際に例えば、円を描きたいと思えばフリーハンドで○を描くと、手の癖のような意図しない雑が入る。そのため「円」という言葉と同様に、他者との共通のイメージが一番近くなるようにコンパスを使用して記録している。記録の際にコンパスと定規を用いて描くことで、図面のような見た目になっている。

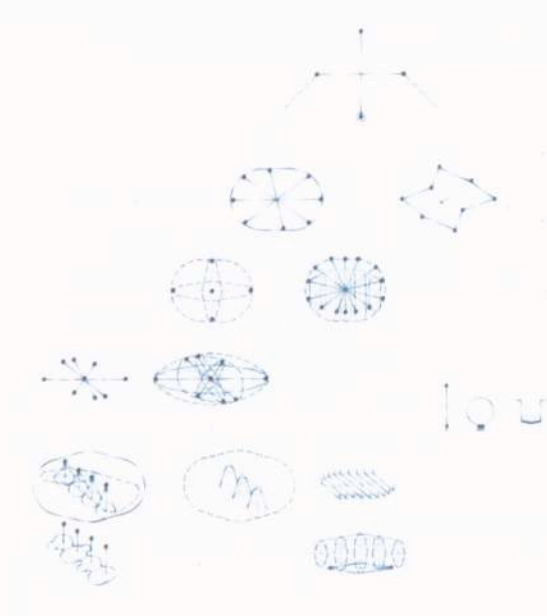
7 タイトルについて

タイトルには、モチーフの名前、観察方法、観察日時、誰の介入によって気づきを得たかなどを記している。モノをどのように捉えようとして試みたか、そしてその日時にどのような気づきを得たのかを記している。モチーフや観察方法が同じでも、数日後、数年後に違った気づきを得ることを仮定し、資料としての役割を果たすタイトルにしている。

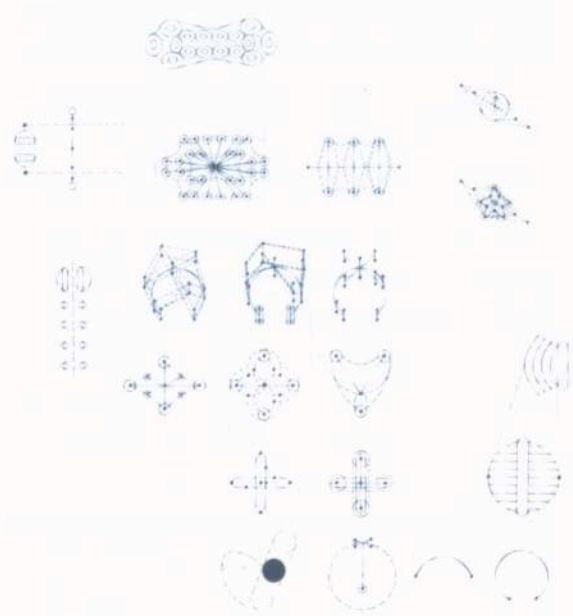
注

1 堀川すなお「enoco[study?] 滞在制作記録 <https://www.enokojima-art.jp/e/wp-content/uploads/2015/06/fd067512c353b4e97aa3c75b570ef3db.pdf>」、2021年9月29日アクセス

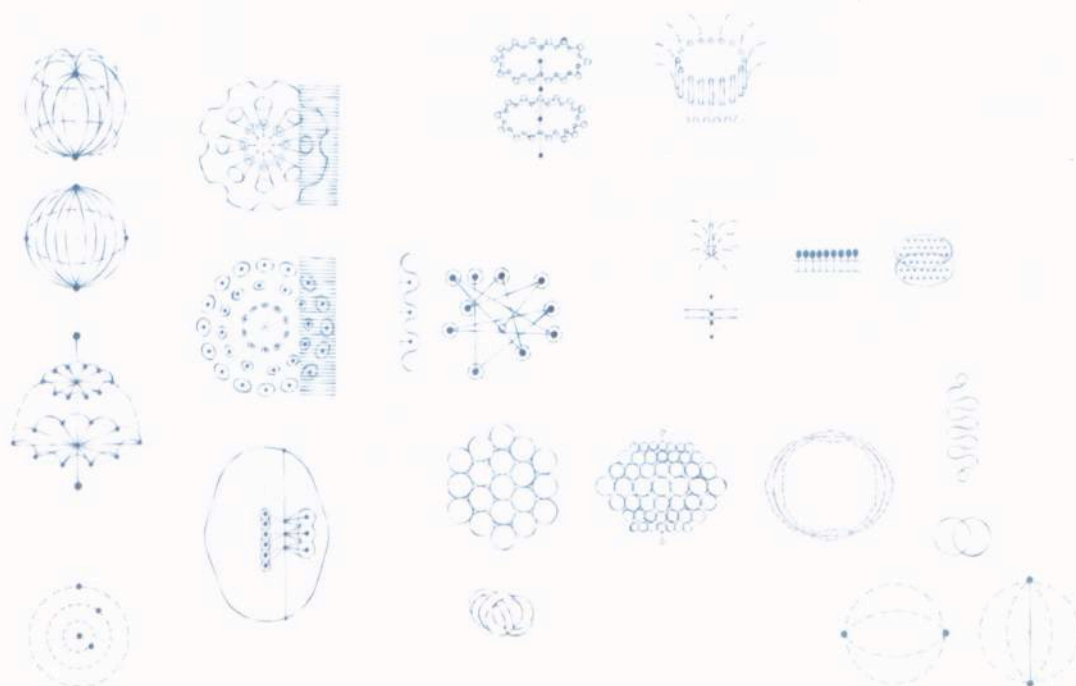
「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig
圧動の移動値#2017.01.08.10:25-11:00(JST)JTY」



「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig
圧動の移動値/空間#2017.01.08.16:50-18:30(JST)JTY」



「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig 圧動の空間作成#2017.01.08.20:00-21:10(JST)JTY」

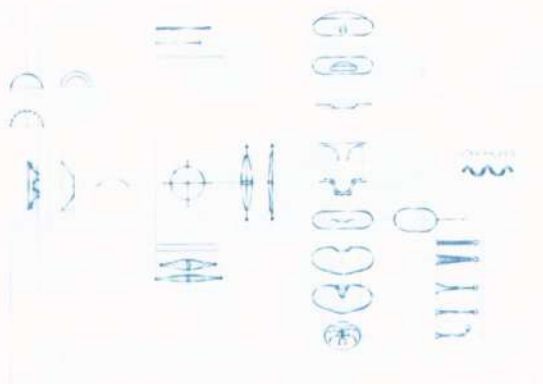


制作年 2017 年

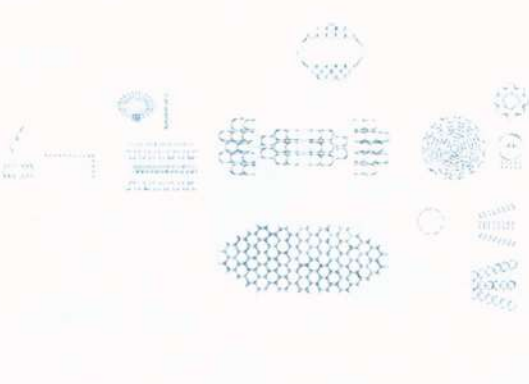
素材：色鉛筆、マイラーフィルム

『GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB no.1-41』部分

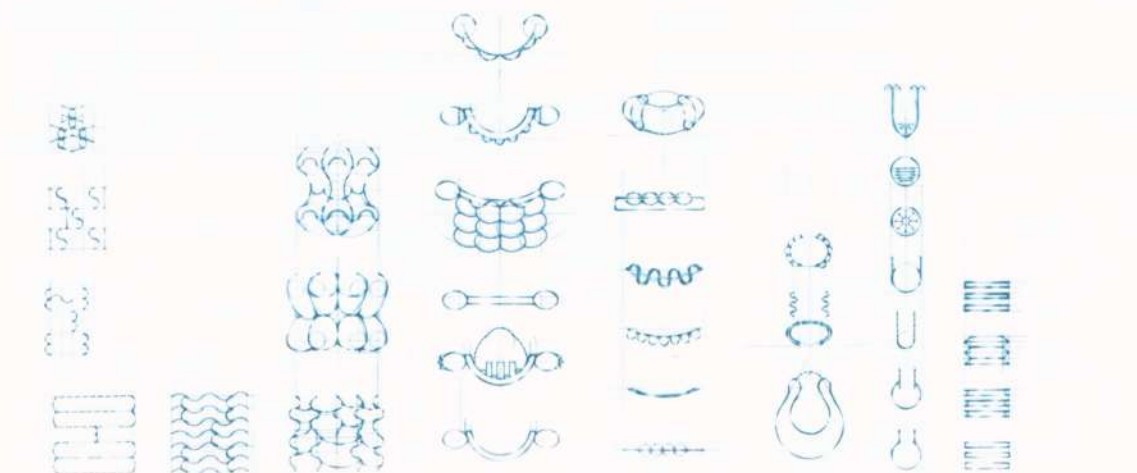
「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig
加軸の方向#2017.01.04.18:10-18:45(JST)JTY」



「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig
密層#2017.01.11.10:35-11:15(JST)JTY」



「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig 蜜層の触手観点#2017.01.13.09:50-10:40(JST)JTY」



「GI-kd16,WD(Jap)-ana・m,KB#1.-WD(J)-fig 圧動#2017.01.10.15:10-16:35(JST)JTY」

